

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 653 号] 2016 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101  
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604  
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 653

November 2016

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 消えた神の名称「エホバ」

『アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳 1725』中のコラール《わが主 エホバ われ歌わん》の表題が《わが主 み神 われ歌わん》と変わることになった経緯について

小海 基 (団員、日本基督教団荻窪教会牧師)

今回、東京バッハ合唱団によって日本語訳初演される『アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳 1725』よりの 10 曲の音楽作品は、バッハの暖かい家庭をほうふつとさせる素晴らしい作品群です。大村恵美子先生の今回の邦訳によって、日本の家庭の歌としても広がっていくことでしょう。単なる演奏会作品というだけでない、各家庭に入っていくものだからこそ、よく吟味されるべき訳語という事があると思います。

そうした意味で、第 7 曲目のコラール《わが主 エホバ われ歌わん》Dir, dir, Jehova, will ich singen (BWV 299) が、《わが主 み神 われ歌わん》と変わることになった経緯について説明しておく必要があると思います。

「エホバの証人」という宗教団体の名称にもなっている「エホバ」という言葉は、そもそも聖書の神の名「ヤハウェ」のことです。「エホバ」と「ヤハウェ」では、全然響きが違うのではないかと皆さんもお感じになると思います。「エホバ」という名は、キリスト教 2000 年の歴史の中で誤用され続けた読み方で、なるほど 18 世紀のバッハの時代には、ルター訳が犯してしまった「誤用」のまま用いられていたでしょうが、現在では「エホバの証人」の人たちが使う「新世界訳」を除いて、世界中のどの言語の聖書でも用いられません。もちろんユダヤ人も（そもそもこの人たちは、モーセの十戒の第 3 戒「主の名をみだりに唱えてはならない」に従っていますから、「ヤハウェ」という聖なる 4 文字の名も口に出しません）一度も使った歴史はありません。「エホバ」という表記は、英語訳なら 1610 年代の「欽定訳」まで、独語訳でも「ルター訳」まで、日本語訳でも明治期の「文語訳」までしか用いられなかった明らかな「誤用」なのです。

習ってみるとすぐわかることなのですが、ヘブライ語はそもそも子音の表記しかなかった文字で、「ヤハウェ」という神の名も「I (=J)」、「H」、「W」、「H」の 4 文字しか表記されていませんでした。モーセの十戒が「主の名をみだりに唱えてはならない」と命じますから、ユダヤ人たちは聖書にたくさん出てくる神の神聖な名「I HWH」が出てくるたびに「アドナイ」

(主)と読み替えていました。条件反射のようにこの 4 文字が目に入るや否や「アドナイ」と発音していたのです。

やがてヘブライ語も、母音を子音の下に振り仮名のように付ける時代が訪れます。その背景にはバビロン捕囚で国を失い、文字としてのヘブライ語は読めても生活語としては話せない、アラム語（シリア語）しか話せなくなってしまう時代が訪れるからです。旧約聖書は全部ヘブライ語で書かれているわけではありません。後半のダニエル書からはアラム語（シリア語）で書かれています。イエス様も日常生活では、アラム語で「アバ（父）」と話したり、祈ったりしていたという説があるくらいです。

文字としてしかヘブライ語が残らないようになると、これまでなら条件反射で「アドナイ」と読み替えていたのが、つついっとうっかり聖なる 4 文字の名を読んでもう人が出てくるといけないので、「I HWH」の下にこの文字だけはうっかり読んじやいけないよ、くれぐれも「アドナイ」と読み替えるのだよと、「a/o/a/i」と母音のルビを振るようになります。モーセの十戒にうっかりでも背いたら、「死刑」(石打の刑)に処せられてしまうからです。そのうちにユダヤ人さえも「I HWH」の下に「a/o/a/i」と母音のルビを振っているこの文字を、「アドナイ」と読み替えることは分かっている、そもそも本当のところはどう読むのかわからなくなってしまいました（「ヤハウェ」という風に現在のキリスト者が読んでいるのも実は仮説にすぎません）。

「I HWH」の下に「a/o/a/i」と母音のルビが振られているこの言葉を読む必要が生じたのは、今から 500 年前の宗教改革者たちの時代です。来年の 2017 年こそが 500 周年の記念の年となり、東京バッハ合唱団は《口短調ミサ曲 [日本語版]》を再演しますが、この宗教改革者たちが、それまでカトリック教会が正式の聖書としていたラテン語訳（ウルガータ）を礼拝で使うのをやめ、自国語訳で読むことを始めたからです。このことはラテン語訳聖書の誤訳、誤解釈も明らかに

なり、ヨーロッパの庶民層に至るまで宗教改革が浸透していき原動力になります。当時のカトリック当局は各国の聖書翻訳者たちを火あぶりにして処刑し、聖書翻訳熱を鎮静化しようと躍起になりますが、それは無理でした。

こうした情熱の時代にこそ「名訳」が生まれます。「ルター訳」、「欽定訳」、日本なら「文語訳」……といった「名訳」です。バッハの原語上演に固執する「原理主義」と戦う大村恵美子訳の戦いみたいなものです。しかしどんな「名訳」にも「誤訳」、「誤用」がつきもので、それが「I HWH」の下に「a/o/a/i」と母音のルビが振られているこの言葉を合わせて、「エホバ」と読んでしまったこともその一つでした。「名訳」すぎたために、これが明らかな「誤用」だと分かっても、なかなかこの刷り込みから自由になれなかったわけです。バッハ自身やバッハの用いたコーラルの作者、カンタータの台本作家たちが「エホバ」という「誤用」を続けたのも、ルター訳が「名訳」過ぎたから仕方のないことです。

「エホバの証人・ものみの塔」の人たちが自分たちのグループ名に「エホバ」を使ってしまったのも、「欽定訳」が「名訳」過ぎたせいです（もっとも「エホバの証人」の人たちは、自分たちの「新世界訳」によって「欽定訳」を含むあらゆる聖書の翻訳をけなすのですが、「エホバ」という「誤用」だけは改めようとしません）。脱線してちょっとだけ触れておきますと、「輸血拒否」の教説等で問題になる「エホバの証人」というグループは、19世紀末にアメリカのペンシルバニア州ピッツバーグの、セブンスデー・アドヴェンチスト教団というキリスト教の教派に属していたチャールズ・ラッセルという人が、自分は新しい啓示を受けた、「世の終わりが近い」という「終末思想」に執着して唱えたグループで、当初はほとんど相手にされなかったのですが、たまたま彼の死後、後継者となったヨセフ・ラザフォードがさらに具体的に「1914年」こそが「世の終わり」と予言し、まさにその年に「第1次世界大戦」が勃発してしまったために大流行してしまったというグループです。私などは、「1914年」で世界が終わらずその後も続いていることこそが、この「三位一体」を否定するこのグループの何よりの間違いであったことの「証明」であると思うのですが、なかなかそういう風に信者は考えないのですね。このグループの中には第2次大戦で反戦、兵役拒否を貫いて投獄された灯台社（かつて荻窪にあった！）の明石順三みたいな立派な人も出たのですが、そもそものアメリカの教団本部自体が「白人中心主義」であり、「ヨハネ黙示録」の示すような神の国、新しいエルサレムを待ち望んでいるのでなくて「アメリカ国旗」を掲揚して礼拝を守るような「米国中心主義者である」ことに、戦後、明石順三は触れて躓き、「転向」してしまいます。

バッハ翻訳の世界の中の大村恵美子訳の重要性は、

聖書の諸翻訳の中の「ルター訳」、「欽定訳」、「文語訳」に当たる重要な位置づけを持ちます。それだけに、このたびの上演に際し、「ルター訳」、「欽定訳」、「文語訳」の「誤用」を正して、「わが主 エホバ われ歌わん」（原詞 Dir, dir, Jehova, will ich singen）を「わが主 み神 われ歌わん」と訳し直した意義はとて大きいと、ひとりの牧師として私は思います。

## 要約『カントル・バッハ』 連載 [1]

マニーフィカト（わが魂は主をあがめ）

ポール・デュ・ブシェ [著]

大村 恵美子 [訳]

要約・紹介：松尾 茂春（団員）

### 要約連載について

もう20年以上も前のこと、元団員のおひとりが、旅行中に面白そうな本を見つけました、とってお贈りくださったのが、この本の原書でした。Paule du Bouchet, *Magnificat Jean-Sébastien Bach, le Cantor*, Gallimard 1991. 原著者が1951年生まれフランス人女性ということで親しみを覚え、いずれ翻訳刊行の折りもあろうかと月報に連載を始めたのが、1990年代の終わりだったでしょう。が、すでに訳書が出ていることを後で知り、それではと、内輪での回覧用に、月報掲載の稿を冊子の形にまとめることにしました。それが2000年7月に、100部ほどを発行した自家製本の『カントル・バッハ』でした。

新しい団員が多く加わるようになったので、「バッハ」という人物に関する、ある程度の認識を共有したいと思ったとき、思い出したのがこの冊子でした。既に手元には1冊も残っていませんので、ベテラン団員の松尾茂春さんに、『カントル・バッハ』を要約のかたちで紹介していただきながら、必要とあらば、複製リメイクも考えてもらっています。

松尾さんには、過去5回の合唱団のヨーロッパ演奏旅行の思い出もそこに加えていただきながら、のんびりと連載してください、とお願いし、ご快諾をいただきました。（大村恵美子）

<内容>

第1章：ルターのもとでのヨーハン・セバスティアン  
（マルティン・ルター、先祖たち、誕生～リューネブルク時代）

……連載 [1]（今回）

第2章：修業時代（アルンシュタット、ミュールハウゼン）

第3章：偉大なオルガニスト（ヴァイマル）

第4章：ブランデンブルク協奏曲（ケーテン）

第5章：カントル・バッハ（ライブツィヒ）

第6章：音楽の献げもの（フリードリヒ大王の客人、歿後）



■「学校の合唱団に入り、素晴らしいソプラノの声をもって演奏に参加します」……《6人の演奏（部分）》画・ヴァラントン、17世紀、パリ・ルーヴル美術館、口の理想的な開き方として、よく参照されます。〔カントル・バッハ〕5ページ挿画〕

## 第1章

### ルターのもとでのヨーハン・セバスティアン

第1章ではヨーハン・セバスティアン・バッハが生まれ育つ背景、その源流から話が始まります。

バッハ誕生に先立つ150年前、アイゼナハのゲオルク教会の講壇で宗教改革の門戸を開いたマルティン・ルターが、音楽を「神の言葉のつぎに祝福されるに値するもの」と礼賛したこと（「音楽礼賛」Encomion Musices、1538年）を紹介し、「ルターの信仰と音楽、この2本の横軸の上にすべては始まります」と著者は記します。

バッハの一族は何世代も前から音楽と共にありました。先祖のファイト・バッハ（1577年頃死）はヴェヒマルの粉挽きで、製粉機のリズムに合わせてツィトリンゲン（チターの一種の弦楽器）を奏で、以来ファイトとセバスティアンのあいだには、31名以上の音楽家が名を連ね、内28名はリュート奏者、鍵盤楽器製作者、カントル、教区オルガニスト、町や宮廷の音楽師になりました。バッハ家にあっては音楽のわざは自然の一部であり、そのような中、1人の町音楽師の4番目の息子として生まれたのがヨーハン・セバスティアン・バッハでした。時は1685年3月23日。父ヨーハン・アンブロジウス・バッハがこのセバスティアンに洗礼を受けさせた場所は先のゲオルク教会でした。これは歴史的な符合なのか？「ヨーハン・セバスティアン・バッハの全生涯は、それについての象徴の価値を証する」と著者は語り始めます。

#### ・テューリンゲン地方の中心、アイゼナハ

この森の都にセバスティアンの先祖たちは足跡を残し、バッハ家の人々の名前がドイツ語の中に根付くほどにテューリンゲン地方に根を張りましたが、漂流

のあとを思わせるもの（バッハは〈小川〉であるが、〈旅回りの音楽家〉といった意味の地方方言の可能性）もあるようです。この地方の中心、アイゼナハの町は音楽を重んじ、民間の活発な文化により養われた音楽嗜好はバッハの美学と資質に対する貴重な土台となりました。

#### ・「年額40グルデン4グロシェン9プフェニヒおよび住居を提供」

父ヨーハン・アンブロジウスは尊敬され、一家は窮屈な住居にあっても静謐な信仰と生き生きとした音楽のなかにはありました。しかし、4人の子供の命が次々と奪われる試練があり、幼いセバスティアンにとっては「生」について考えさせられる早熟な前奏曲となったことでしょう。セバスティアンはオールドルフのオルガニストに就任した長兄ヨーハン・クリストフからオルガンを、父からはヴァイオリンを学び、共に才能をあらわしました。

#### ・ラテン語と言葉、生きた言葉

セバスティアンは8歳でアイゼナハのラテン語学校に入学、ラテン語では兄を追い抜くほど優秀でした。学校の合唱団に入り、素晴らしいソプラノの声をもって演奏に参加します。

#### ・9歳で孤児に

しかし入学の翌年、セバスティアンは両親を相次いで失い、家族は離散、長兄ヨーハン・クリストフに引き取られました。セバスティアンはオールドルフのラテン語学校の合唱団で歌い、報酬を受けるようになります。通常18歳で進む最上級に14歳で達したセバスティアンはルター派の教義にも熱中、宗教的な基盤も強めます。

#### ・勉学への情熱

兄に鍵盤楽器と共に作曲の手ほどきも受けたセバスティアンは、イタリア、ドイツ、フランスの作曲家たちの作品を知り、写譜し、兄からの課題は知り尽くしました。ドイツの巨匠の作品を月夜にこっそり写譜し、兄に没収されたという話は有名です。セバスティアンは後に鍵盤楽器のための最初の作品の一つ、〈カプリッチョ、トッカータとフーガ短調〉をこの兄に献呈することになります。

#### ・リューネブルクの合唱隊員

14歳を過ぎて後、セバスティアンは北ドイツの町、リューネブルクのミカエル学校の養成所まで徒歩で350Kmを超える旅をし、最高水準の特殊合唱隊に受け入れられ、高度な宗教的ポリフォニーを歌い、わずかながら毎月の収入と行事での手当てを受けることになりました。しかし程なく声変わりですプラノの美声を失い、鍵盤楽器、弦楽器等、器楽の演奏に従事するようになります。

#### ・音楽的遺産を受け継ぐ

ミカエル学校には1102巻に及ぶ膨大な蔵書を有する音楽図書館があり、ヨハネ教会の資料館には多数の

原典、筆写譜を有するなど、参考資料の土台としての宝庫がそこにありました。また、合唱隊のメンバーは若い貴族のための学校の授業に出ることが許されており、そこで教えていた舞踏教師トマ・ド・ラ・セルを通じたツェレ宮廷との繋がりから、セバスティアンは多くのフランス人に会い、フランス音楽に親しむ機会を得ることができたのでした。

#### ・イタリア様式対フランス様式

カルヴァン主義に傾倒したツェレ宮廷では宗教音楽はほとんど演奏されなかったかわりに室内楽演奏が盛んでした。そこに滞在した巨匠たちによってドイツに紹介されたフランス音楽の様式があり、また一方でイタリアからもたらされた様式もあり、両者は対立し競い合うようになっていました。

#### ・〈和合趣味〉とドイツ様式

2つの作風の間で文化的葛藤の結果、それはテレーマンに推進されてドイツ音楽の特性となりますが、こんな時期にバッハが到着したのでした。セバスティアンはフランソワ・クーブランの作品に驚嘆し、オルガニストであるゲオルク・ベームを訪れ、ハンブルクに旅して尊敬するオルガニストである J. アダムス・ラインケンによる変奏に聞き惚れます。このリュートブルクでの3年間での収穫—そこで発見したすべてのものを、彼は愛し、理解し、取り入れ、やがて乗り越えます。

第1章は17歳となったセバスティアンが1702年の復活祭にミカエル学校を卒業するまでで終わります。ここに登場した都市、アイゼナハ、オールドルフ、リュートブルク、ツェレ、ハンブルクは、東京バッハ合唱団のヨーロッパ演奏旅行に際して訪問した思い出の場所でもあります。

ルターとバッハゆかりの地であるアイゼナハは第2回と第4回の演奏旅行で訪れましたが、町のたたずまいと、そこに響く音が印象に残っています。ゲオルク教会での演奏は1988年8月19日と1997年8月10日ですが、特に初回、2階下後方ギャラリーのパイプ・オルガンの前に並び、階下および2階3階4階それぞれのサイドのギャラリーを埋め尽くした人々に囲まれて歌ったカンタータ(6番他)、モテット(最後は6番)が会堂とも人々とも共振した思いがしたことが忘れられません。

北ドイツにあるリュートブルク、ツェレ、ハンブルクへは第3回演奏旅行(1993年8月8~22日)の前半に訪れましたが、歩いて回ったリュートブルクの落ち着いた町並みが特に心に残っています。またオールドルフには第4回演奏旅行(1997年8月6~16日)にて、テューリンゲンのバッハゆかりの各町をバスで見学する中で立ち寄ったのでした。

【つづく】

## // おたより //

佐藤 千支子様より

大村様、おなつかしいお便り本当に嬉しくございました。バッハ合唱団の力強い御活躍ぶりは、何かにつけいろいろの所でお聞きし、尊敬申し上げておりましたが、小口さん(ソプラノ団員)が、私共の目白町教会で受洗され、聖歌隊(といっても、考えられる限り最小規模の)で一緒するようになり、いっそう、バッハ合唱団が身近に思われていたこの頃でした。

目白町教会は、私の生年と同じ昭和4年(1929年)、この地に創立されまして、私は30歳代のとき受洗以来の母教会です。大村様は、初志を曲げず尊いお仕事に邁進なさっていらっしゃいますが、私のほうは税理士事務所を閉じまして完全に隠居の身となってから、もう15年余り経ちました。自分の寿命の見積もりを、間違えていたのかもしれませんが。

お二方に再びお目にかかれる機会に恵まれれば、どんなになつかしく嬉しいことでしょう。バッハ合唱団がこれからも長く大勢の方の拠りどころであり続けましますよう、お祈りいたします。どうぞご自愛下さいませ。

9月9日



大村 恵美子(主宰者)

敬老の日ゆかりの日付(9月9日、重陽)で、このようなお手紙をいただきました。1975年、大村健二ら3人の団員の発意で、経堂に「カフェハウス・バッハ」を運営しはじめた時、ずぶの素人ばかりの商売のために、姉の大学時代の同期生であった佐藤様が、毎月ご来店の上、税務関係一切を仕切ってください、経営にも貴重なアドバイスをいただきました。「よく働いておられ、内容もいいのに、なかなか黒字になりませんか」と同情しておられました。駅前の通りの商店側どまんなかで、常連も多く、また合唱団関係の方々の溜り場になって、バロック音楽の流れる中、一杯のコーヒーで談話もはずみ、学生などはレポート書きや宿題、さては外での昼食をはさんで、一日中店内で過ごすモサも。主宰者の客間といった感じで、10数年活動しましたが、母の病死後、その遺産でやっと赤字を清算して、この「難題」は終わったのでした(1989年解散)。

小口さんの仲立ちで、何十年ぶりかで佐藤様との旧交がつながり、貴重なお手紙が届いたわけですが、私はここに、当合唱団の全盛期をつくり上げる大きな一因となった、居心地のよい「応接間」としての「カフェハウス・バッハ」の裏話が、現在の方々にも伝えられるよすがと感じられ、ご紹介することにしたのです。佐藤様、ありがとうございました。(佐藤様は、松戸市の〈エデンの園〉で、ご健康にも恵まれ、主日ごとの聖歌隊に励まれるという、理想的な日々を送っていらっしゃいます。)